ドイツ語の dramatisch と日本語の「劇的」
—両語詞に関する意味・用法の比較—

金　山　正　道

はじめに

「的」という字を添えた「科学的・精神的・宗教的」など「何々的」ということばが今日、日本語のなかに氾濫している。接尾語「的」を添えたことばが二つ三つと同じ一つの名詞に冠されているのをみると、その書き手が自分の使った「的」の付いた語に関し、意味内容をきちんと意識して使っているものかと疑ってみたくなることさえある。これはどちらかといえば文章語の場合だが、話し言葉でも「的」の氾濫は広がっている。若い人たちの間では、「自分的」や「僕的」ということばが今日結構使われている。「自分的にはあまりいいとは思わない」といった具合である。「私としては（または「僕としては」、あるいは「自分としては」）あまりいいとは思いません」と明確に言えない世代の婉曲表現なのか、あるいは明確にきちんと言わないことがむしろ「カッコイイ」と考える世代がつくりだしたことばなのかと個人的に少しばかり考えてもみたが、若者たちの意見をきく NHK のある番組で、司会役の人物も含め、「鈴木さん的には」、更には「浩君的には」という類の表現が使われたのを耳にしたときには、さすがに苦笑した。司会者は若者たちとの距離を縮めようと彼らの言葉遣いにならったのかもしれないが、「的」もここまできたかという感を抱いた次第である。

ところで、「何々的」ということばは、乱用せずに、接尾語「的」の表す意味を意識して使えば、簡潔で要を得た表現を形成しうるものであり、今日、日本語のなかに定着しているものも多い。上に上げた「科学的・精神的・宗教的」はもとより、「知的・端的・抽象的・積極的・現実的」など枚挙に遑が無いといっても過言ではない。殊に若い世代の新たなことばまで含めると、まさに枚挙に遑無し、である。このような実情に応じ国語辞典は、未定着の新語は別としても、今日の日本語にすっかり根付いた接尾語「的」を有する語詞を収録し、釈義を与えている。そのなかで、ある国語辞典の与える一つの釈義がかねてより気に掛かっていた。それは『広辞苑』における「劇的」の釈義である。ここでそれを引用してみよう[1)]。

> **げき-てき【劇的】**劇に出て来るようなありさま。緊張し
> 感激させられるさま。「**—**なシーン」

---

1) 『広辞苑』第五版より引用。

西暦2000年から毎年『広辞苑』に収録されたある項目の「解説」に関して論考を発表してきた[2)]。国語学者でもない筆者が、一巻本の国語辞典としては〈国語＋百科の最高峰〉を自認する辞書の解説に批判的検討を加えるのであるから、項目は一つに絞った。すなわち、国語項目ではなく、百科項目の「ファウスト」であった[3)]。愚の一念でファウスト文学、殊に16世紀からゲーテに至る「ファウスト」を研究してきたが、区分記号①、②、③から成る百科項目「ファウスト」の解説のうち①は主に16世紀の「ファウスト」、②は「ゲーテ」、③は音楽の分野から「グノー」に当てられている。16世紀の資料に立ち返り、16世紀のファウストを主題とした研究を発表している者が少ないだけに①は筆者にも検討の余地があった。また、①、②、③には相互に緩やかな連関があるため、②に対しても言及しうるところがあった。文学以外の芸術分野における「ファウスト」もまた筆者の研究対象であり、これに関しても我が国では発表された研究が決して多くはないだけに現行の解説に対して「対案」を提示しうる余地があった。

百科項目「ファウスト」に関する三篇から成る考察の「前編」、「序章」において筆者は、「国語項目の解説に関しては、碩学諸賢のお仕事ゆえ間違いなきことと信じ（後略）」[4)]と述べたが、こう述べたときの筆者の気持は、実は、森鷗外の短編『最後の一句』における娘「いち」のまさに「最後の詞（ことば）の最後の一句」[5)]、「お上の事には間違はございますまいから」[6)]に託された思いと一脈を通ずるものがあったことをここに記しておきたい。

百科項目「ファウスト」に関してならばまだしも、国語学者でもない筆者が〈国語＋百科の最高峰〉を自認する辞書の「国語項目」の解説に対してあれこれ言ったところで説得力はない。しかし、「劇的」は、疑問を感じている国語項目のなかで、ゲルマニストの筆者にも発言しうるところのある語詞である。

接尾語「的」を有する語詞のうち「浪漫的・詩的・劇的・公的」などは、ヨーロッパの言語における語詞の、日本語への翻訳との密な関係からうまれたことばである。従って、ドイツ語を中心として、ヨーロッパの言語・文学ならびに文化を研究する筆者にもこの種の語詞に関しては、日本語学者でなくとも発言の余地があるのではないだろうか。

---

2)　次の拙論三篇を指す。
　1．「『広辞苑』の解説に関する批判的考察――百科項目「ファウスト」の解説に対して（前編）――」〔『福岡大学総合研究所報』第231号、「人文・社会科学編」（第160号）、2000年、1～48頁〕。
以下、掲載誌名等は省き、単に、「『広辞苑』の解説に関する批判的考察（前編）」○○頁参照、と記す。
　2．「『広辞苑』の解説に関する批判的考察――百科項目「ファウスト」の解説に対して（中編）――」〔『福岡大学総合研究所報』第248号、「人文・社会科学編」（第175号）、2001年、27～79頁〕。
以下、掲載誌名等は省き、単に、「『広辞苑』の解説に関する批判的考察（中編）」○○頁参照、と記す。
　3．「『広辞苑』の解説に関する批判的考察――百科項目「ファウスト」の解説に対して（後編）――」〔『福岡大学研究部論集』第２巻＝A 人文科学編、第３号、2002年、21～78頁〕。
以下、掲載誌名等は省き、単に、「『広辞苑』の解説に関する批判的考察（後編）」○○頁参照、と記す。

3)　「国語項目」と「百科項目」ということばは『広辞苑』の「凡例」と「後記」で使われており、「解説」ということばについても同様である。

4)　「『広辞苑』の解説に関する批判的考察（前編）」５頁参照。

5)　『鷗外歴史文学集』第三巻（岩波書店　1999年発行）、239頁より引用。

6)　上掲書、238頁より引用。

ファウスト文学を主たる研究領域としてきたが、ファウスト文学は、トーマス・マンの『ファウストゥス博士』や刊行された最初のファウスト作品である『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』（1587年）など散文で書かれた作品もあるにはあるが、その多くが、ゲーテの『ファウスト』に代表的な例をみるように、「戯曲」つまり「劇」である。さらにいえば、ゲーテとの関連でファウスト文学とともに「シュトルム・ウント・ドラング期」、すなわち「若きゲーテ」の時代――この時代はファウスト文学史全体のなかでも戯曲「ファウスト」の創作が盛んであった時期である――にもある程度深く入り込むことになったが、この時期の作品の主要なジャンルは「詩」と「戯曲」である。シュトルム・ウント・ドラング期のドイツ文学作品で今日に名をのこす著名な作品のうち、「詩」および「戯曲」（つまり「劇」）でないものは、『若きヴェルターの悩み』一作であるといって過言でない。つまり「劇」とながく付き合ってきた筆者にとって、ドイツ語の名詞 Drama に接尾辞 -isch のついた dramatisch、あるいは英語の名詞 drama に同じく接尾辞のついた dramatic、そして日本語の名詞「劇」に接尾語「的」を添えた「劇的」に関する意味・用法の異同は一つの関心事であり、浅学の程を省みず筆を執った次第である。

1.「的」の使用に関する問題と疑問――導入部として

今日、接尾語「的」の添えられた語詞がすべて外来語系とは限らないが、「劇的」はもとより「形而上派的・史的・詩的・美的・公的・浪漫的・機械論的」などの語詞はヨーロッパのことばを邦訳する際にうまれた、あるいはその語詞が使われた当初は何よりも翻訳との関係で日本語に根付いていったことばである。今日「公的扶助」ということばにときどき出会う。考えてみれば生硬なことばである。しかし、頻繁に耳にし目にすることによって、その生硬さを世人の多くがもはや感じなくなってしまっているのではないだろうか。その生硬さの原因はどこにあるのか。「公的扶助」が日本語に登場したのは第二次世界大戦後のことであり、英語の public assistance がこのことばの根底にある。当初は「公衆保護」とか「社会救済」などと訳されていたそうだが、接尾語としての「的」あるいは「私的」や「公的」といったことばの使用が戦後頻繁になるにつれ、「公的扶助」として定着した経緯がある。つまりここに、すなわちいわゆる翻訳語であるということに、このことばの生硬さの原因があるといえよう。文学あるいは広く芸術の世界で用いられる「詩的リアリズム」や「詩的写実主義」といったことばの背景にもヨーロッパのことばがあることはいうまでもない。弁証法的唯物論・史的唯物論・機械論的唯物論に至ってはまさに外国語の述語をそのまま邦訳したものに他ならない。接尾語「的」を有する語詞は「に（または、には）」をつけて副詞としても使われるが、形容詞としては「何々的何々」というかたちで用いられることが多い。「科学的説明」ということばもこのかたちをとっており、今日では小学生でも使うことのあるかもしれない何気ないことばである。しかしながら、ことばの歴史をたどっていくと、このことばの場合にも scientific explanation が背景にあるようである。今日では、翻訳におけるこの用法、すなわち名詞に「的」を添えるやり方は著しく拡張され、ついには「僕的」とか「浩くん的」といった表現さえうみ出している。こうなると、もはや翻訳とは無縁な、この意味ではまさに日本語そのものとしての独自の

用法から新たな語詞や表現がうまれている次第である。

このように拡張された用法からうまれたことばは別として、本稿で扱う「劇的」はその本源的な出所――とでもいおうか――がヨーロッパの言語にもとめられることばである。従って、ドイツ語学・文学を専門とする筆者としては、考察の手順として、まずドイツ語の dramatisch（訳せば、劇的）の意味・用法の再確認をおこない、次に我が国の権威ある辞書『広辞苑』の与える「劇的」の釈義と比較してみる。その上で、『広辞苑』の与える「劇的」の釈義は、上に見たように、いわば一義であるのだが、現代の日本語において本当にそうであるのか、ドイツ語の dramatisch が持っているような他の意味は有していないのかということについて検討する。

これが以下の考察の手順であるが、『広辞苑』と同じく岩波書店から発行され、筆者自身も『広辞苑』同様ながく愛用してきた『岩波　国語辞典』に立てられた見出し「的」に関する説明で、気に掛かるところがあるので、ここで触れておきたいと思う[7]。

てき〖*的〗〔的〕テキ まと ①弓を射るときのめあて。まと。「射的・標的・目的・金的」②よくあたる。「的中・的例」③あざやか。はっきりしている。あきらか。「的然」④はっきりしてまちがいがない。たしか。「的確・的当」⑤名詞に添えて「…のような」「…の性質を帯びた」「…の状態をなす」などの意を表す。また英語の -tic の音訳にも用いる。「私的・知的・美的・詩的・端的・病的・劇的・人的・物的・精神的・現実的・科学的・宗教的・浪漫的」⑥人名・職業名などの一部に添えて親しみを表す。「取的（とりてき）・泥的（どろてき）」

われわれの問題との関連でピック・アップすべきものは⑤である。「英語の -tic の音訳にも用いる」とあるが、ドイツ語学・文学を専門とする筆者の立場からドイツ語の世界に置き換えていえば、「ドイツ語の接尾辞 -isch 等[8]の音訳にも用いる」となる。

ファウスト文学に関する研究において「ファウスト的」とか「ファウスト的なるもの」ということばが用いられ、その概念が問題とされたことがある（また、されることがある）。この二つをドイツ語で示せば、それぞれ faustisch、Das Faustische である。殊に「ファウスト的なるものとは何か」ということは一考に値する問題であるが、今日「ファウスト的」とか「ファウスト的なるもの」と言う場合には、普通ゲーテの『ファウスト』から得られるところの概念がその理解や発想の

---

7)　西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波　国語辞典』第５版（1994年）より引用。

8)　-isch のほかにも形容詞をつくるドイツ語の接尾辞として -os、-lich、-ig、-barなどがあるが、これらの接尾辞を有する語のなかにも、例えば religiös、menschlich、geistig などしばしば「的」を用いて訳されるものがある。尚、注11も参照されたい。

根底にある[9]。ただ、過去においては旧東ドイツの『ドゥーデン』が faustisch の釈義として、ゲーテではなく、16世紀の伝説の人物ファウストを基準としたこともあるし[10]、ファウスト文学全体を通観するとき、それぞれの時代の「ファウスト的」あるいは「ファウスト的なるもの」について考究することは、考えられうるテーマである。つまり、例えば、16世紀に「ファウストのごとき行いをせぬこと」と言われるとき、「ファウストのごとき行い」とは、換言すれば、「ファウスト的所業」である。すなわち、faustisch という形容詞こそまだうまれていないが、16世紀という時代における「ファウスト的」とか「ファウスト的なるもの」という概念について考えることは可能である。そして筆者の場合、faustisch という形容詞がいったいいつごろ登場したのかという事柄への関心から、言語の世界にさらに深く入り、そもそもドイツ語において接尾辞 -isch をつけることによって形容詞をつくることがいつごろからおこなわれたのかという問題についても学んだ次第である。

この関心を抱いたのはすでに学生時代のことであった。ドイツ語の場合にも、romantisch や phantastisch のように語尾が -tisch、すなわち接尾辞 -isch のまえに字母 t の入るものがあるが、学生時代であっても「ドイツ語において -tisch を添えることによって形容詞をつくることがいつごろから始まったのか」と考えたことは一度もなかった。それだけに「英語の -tic の音訳にも用いる」という『岩波　国語辞典』の説明には唖然とした。

economic、public、classic など -tic ではなく、-ic でおわる語もあり、-ic の音訳に「的」が用いられたケースもあるのではないだろうか。というよりも、この種の形容詞の接尾辞は一般的にはそもそも -tic ではなく、-ic とされるのではなかろうか。用例に「科学的」、つまり scientific が挙げられているだけに「英語の -tic の音訳にも用いる」という説明を以外に思う気持は一層強まった。日本語の「科学的」ということばが英語の scientific から生じたものかどうかは別としても、英語から日本語への音訳という事柄に言及する過程で、用例に掲げられた語詞とそれらを英語でいえばどうなるかという程度のこは当然想起され、一般的説明に際して、接尾辞の確認ぐらいなされてもよさそうなものだが、と感じた次第である。

『岩波　国語辞典』はいわば小辞典である。従って、収録された語詞の説明に多くを要求することはできない。technical という語は恐らく中学生でも知っており、しばしば「技術的」と訳される。それどころか「テクニカル・ファウル」や「テクニカル・ノックアウト」のように英語の音を

---

9) 参考までに現在『ドゥーデン』の与える faustisch の語釈を示せば、次のとおりである。
faus|tisch <Adj.>［nach der Titelgestalt von Goethes „Faust“］（bildungsspr.）: *stets nach neuem Erleben u. Wissen, nach immer tieferen Erkenntnissen strebend u. nie befriedigt:* ein -er Mensch; ein -es Streben.
Vgl. Duden: Das gro e Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden. 3., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Herausgegeben vom Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion. Mannheim 1999.
但し、Duden: Das gro e Wörterbuch der deutschen Sprache（1999）からの引用は、本稿ではすべて下記の CD－ROM 版を用いている。
Duden: Das gro e Wörterbuch der deutschen Sprache. 10 Bänden auf CD-ROM. PC- bibliothek Version 2.01 mit Plus-Paket. ISBN: 3-411-71001-2.

10) 1953年旧東ドイツのライプチヒで刊行された『ドゥーデン』には、„nach Art und Wesen des Faust, einer Gestalt der dt. Volkssage“ とある。

いわばそのまま片仮名表記して使われることもある。すなわち、謂わんとすることは、「technicのように -ic に終わる名詞の場合には -ical として形容詞化する」といったいわば細則の掲載は要求すべきではない。これは「日本語」ではなく、「英語」の問題である。

これに対して、現実におこなわれた説明のなかにある発言の不適切さの問題は別である。筆者の個人的な意見を述べれば、「英語の -tic の音訳にも用いる」は必ずしもおこなう必要のない説明と考えるが、説明する以上は簡潔な記述のなかにも正確を期する必要があろう。economic、scientific、public などの語からも明らかなように「英語の -ic の音訳にも用いる」とされるべきではなかろうかと考える次第である。なお、さらに言いたいこともあるが、本文に記すことは控えたので、注11を参照いただければ幸いである[11)]。

最後に一つ疑問を提出しておきたい。国語学者でない筆者は＜名詞に添えて「…のような」「…の性質を帯びた」「…の状態をなす」などの意を表す＞「的」の用法がいつごろ日本語に入ってきたのか、またどの言語の語詞を訳す場合に最初におこなわれたのかということを、恥ずかしながら知らない。仮に英語に最初の例があっても、用法の定着は別問題であるとも考えられる。明治期日本は多くのことをドイツから学んだ。医学・薬学・工学・理学・法学・経済学また音楽関係・スポーツなど、専門用語でドイツ語に由来するものは少なくない。「史的唯物論」や「弁証法的唯物論」は、古い例ではないけれども、それぞれドイツ語の historischer Materialismus、dialektischer Materialismus から訳されたものである。江戸時代のオランダ語などを除けば、明治期、学芸の分野における知識の吸収は英語圏以上にドイツからのものが多かったはずである。翻訳語としての「的」の定着は果たしてどの言語の翻訳行為がもたらしたものなのか、読者諸賢にご教示いただければ幸いである。尤も、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国を中心とする英語圏からの高度な技術

---

11) 「宗教的」と訳されることの多い、ドイツ語の religiös は、英語では religious である。ドイツ語の場合、 -ös の前の i 音がいわば音便化を引き起こし、本来の -os の o をウムラウトさせる。つまりこの場合接尾辞のいわば基本形は -os である。してみると、つまりドイツ語の -os と英語の -ous、あるいは religiös と religious 全体の比較から、ゲルマン語という範疇に属し、兄弟の関係にあるこの二つの言語において、この両語詞が語源あるいは派生という点から同じ源泉に辿りつくことは容易に理解されるところであろう。ドイツ語の -lich に対する英語の接尾辞は -ly であるが、männlich と manly はともに「男らしい、雄雄しい」とも訳されるが、「男性的な」とも訳される。このほかにも接尾辞だけについてみれば、ドイツ語の -ell（あるいは -al）と英語の -al、ドイツ語の -igと英語の -y 等の関係が挙げられるが、謂わんとするのは英語に関する次の事柄である。上に挙げた religious や manly、そのほか spiritual、physical、material、あるいは churchy（国教的な、国教に凝り固まった）なども「的」を用いてしばしば和訳される。仮に英語の場合、邦訳に際しての「的」の使用が -ic に終わる形容詞から始まり、これが -ous、-ly、-al、-y などの接尾辞を有する形容詞の訳に波及したという経緯があるとしても——実際そうなのか筆者は知らないが——、また当初は接尾辞 -ic を有する形容詞のなかでも、特に語尾が -ic でなく、-tic である形容詞に対してのみこの -tic の音訳に「的」が用いられたのだとしても——これまた筆者は実情をしらないのだが——「英語の -tic の音訳に用いる」は現代語に関する説明のはずであり、上記の例ならびに本文で言及した英語のその他の語詞からも明らかなように今日では -tic のみならず、広く -ic の音訳に、あるいは -ous、-ly、-al、-y などの接尾辞を有する形容詞についても「何々的」という言い方で訳されている事実がある。従って、仮に当初は「-tic の音訳に用いられ」ていたとして、「英語の -tic の音訳にも用いられた」、あるいは接尾辞の基本形に関する誤認があったとして、この説明を「英語の -ic の音訳にも用いる」と訂正せよ、というのが筆者の考えかというと、そうではない。この説明文はそもそも必要ない、つまり削除しては如何か、というのが筆者の最終的な判断である。

と浅薄な文化の流入とその後のいわばアメリカナイズの傾向が、片仮名語の乱用をひき起こしたばかりでなく、「的」の使用にもいっそう拍車を掛けたと考えてはいるのだけれども。誤解のないよう申し添えておくと、この発言は「英語の -tic の音訳にも用いる」をさらに批判するものでは全くない。

2．国語項目「劇的」の変遷

『広辞苑』最新第五版における「劇的」の解説はすでに紹介したが、ここで第一版から現代に至るこの項目の変遷を見ておきたい。幾分単調な作業ではあるが、必要なことかと思う。

⑴ 「第一版」の場合

最新の第五版（1998年発行）において用例として掲げられている「劇的なシーン」が、第一版（1955年発行）ではまだ親項目「劇的」に追い込まれ、見出し語として立てられていた。但し、正確に言えば、「劇的なシーン」ではなく、追込項目「劇的シーン」としてである。

げき-てき【劇的】①芝居じみるさま。②緊張し感激させられるさま。**―**・シーン【劇的 scene】①芝居のような場面。②甚だしい緊張や感激を起こさせる場面。

⑵ 「第二版」および「第二版補訂版」の場合

この追込項目が第二版（1969年発行）に至って「用例」となり、解説は次のようになる。

げき-てき【劇的】劇に出て来るようなありさま。緊張し感激させられるさま。「**―**シーン」

第二版補訂版（1976年発行）においてもこの項目の解説は、活字の字配りに至るまで全く同じである。

⑶ 「第三版」以降

これが第三版（1983年発行）で次のようになる。

げき-てき【劇的】劇に出て来るようなありさま。緊張し感激させられるさま。「**―**なシーン」

つまり第二版補訂版から第三版での変化は、用例が「**―**シーン」から「**―**なシーン」へと変更された点である。

第四版（1991年発行）でも解説自体は一言一句違わず同じである。但し、言及すると甚だ滑稽なのだが、第三版の解説二行目冒頭の「し」が前行へ移る。そしてそのすがたで、国語項目「劇的」

は第五版に受け継がれ、今日に至っている。第五版における国語項目「劇的」の全体像はすでに「はじめに」で引用したところである。

従って、『広辞苑』の改訂がおこなわれ、新版が上梓されるなかで、国語項目「劇的」に関しておこなわれた最大の見直しは第二版においてであったことがわかる。その際、筆者の個人的印象ではあるが、「劇的」の語釈のなかに、前版すなわち第一版の追込項目として立てられていた「劇的シーン」の釈義が折衷された感がある。いずれにしても、第一版から第二版における見直しが、改訂史上もっとも劇的なものであったといえよう。

ここで最後に『広辞苑』の前身『辞苑』（1935年発行）から「劇的」にかかわる項目を引用しておく。

げきてき-シーン【劇的―】（名）現實に見られる情景が甚しい緊張・感激を喚起させる場面。

『広辞苑』の前史を形成する『辞苑』にまで遡ると、今日「用例」として掲げられているものが、当初は唯一「劇的」にかかわるものとして、見出し語として立てられていたのである。これが第一版で、「劇的」の追込項目となり、第二版以降は、見出し語としては「劇的」だけがのこり、揺籃期の見出しは解説に追い込まれ、爾後「用例」のかたちで残った次第である。換言すれば、「劇的」という語詞の使用が単に「劇的（な）シーン」にとどまらず、つまり「シーン」のみの付加語ではなく、いろいろなことばに冠され、いわば独立した語詞として使われるようになった事情が背景にあるものと考えられる。以上の事をここでは確認しておく。

3．ドイツ語の dramatisch の場合

英語の dramatic であれ、ドイツ語の dramatisch であれ、あるいはフランス語の dramatique であっても、語義は、『広辞苑』における「劇的」の場合と異なり、二つ以上に分類されている。つまり、これらヨーロッパの語詞にあっては一義ではなく、複数の語義が挙げられているのである。というよりも、これらの語詞の語源を辿るとき、ラテン語の dramaticos、あるいはさらにその奥にあるギリシア語の δραματικός がすでに複数の語義をもっているのである。

ここでは、ドイツ語の dramatisch の語義・用法を紹介し、これを『広辞苑』における「劇的」の釈義を検討するための一つの手掛かりとする。誤解のないよう申し添えておかねばならない点は、次の事柄である。ドイツ語の dramatisch を出したのは飽くまで引き合いとしてであり、日本語の「劇的」がドイツ語に由来するなどという意味では全くない。上に述べたように、ドイツ語の dramatisch も英語の dramaticも、あるいはフランス語の dramatique もすべて同じ語源に遡る。筆者が注目しているのは、日本語の「劇的」がどの言語から入ってきたのかということではなく、ヨーロッパ諸語における複数の語義に対するところの『広辞苑』における一義的釈義の現代日本語における妥当性に関する問題である。また、それ以上に問題を感じているのは、「劇的」の釈義そ

のものである。

それでは、『ドゥーデン』[12] から dramatisch の項を引用する。

dra|ma̲|tisch <Adj.> [spätlat. dramaticos <griech. dramatikós]:

1. *das ↗ Drama (1 a) betreffend, kennzeichnend; zum Drama gehörend: das* -e Werk eines Dichters; die -e Wirkung, Spannung eines Theaterstücks; der -e Höhepunkt; Bertolt Brechts -e Bemühungen zielten im Wesentlichen auf die Sprengung des Rahmens der Guckkastenbühne (Marek, Notizen 83).

2. **a**) *aufregend u. spannungsreich:* ein -es Finale; Die 50 Passagiere wurden in einer -en Aktion mit Hubschraubern geborgen (NNN 12.2. 86,2); das Spiel war, verlief äu erst d.; die Ereignisse haben sich d. zugespitzt;

b) *drastisch, einschneidend:* ein -er Anstieg der Besucherzahlen; Das Waldsterben ... habe eine -e Entwicklung genommen (SZ 22. 10. 85,21); Experimente mit Tischerücken ... oder Telekommunikation können -e psychische Störungen auslösen (Woche 11.4. 97,27); Das Umweltbewusstsein der Bevölkerung hat d. zugenommen (Rheinische Post 12.5. 84,5); In diesem Zusammenhang habe Genscher darauf hingewiesen, dass die Konjunktur in den USA d. nachlasse (Hamburger Abendblatt 24.5. 85,1).

縦線（**|**）によって分綴、文字 a の下のバー（̲）によってアクセントとその音を含む音節の長短（この場合は「長」）が示された見出し語のあとに、<Adj.> によって品詞<形容詞>が明示され、続けて語源に関し、後期ラテン語の dramaticos に由来するが、それがさらにギリシア語の dramatikós に遡ることが［ ］で括り簡潔に示されたのち、語義に関する解説がおこなわれている。語義は **1** と **2** に大別され、**2** はさらに **a** と **b** に区分されている。**1** から見ていこう。

語義として「劇に関する、演劇の、戯曲の」がイタリック体 *das ↗ Drama (1 a) betreffend, kennzeichnend; zum Drama gehörend* で挙げられ[13]、それに、セミコロンで区切られ、三つの用例が続く。すなわち、「或る詩人の戯曲」das -e Werk eines Dichters、「舞台劇の演劇上の効果・緊

---

12) 引用は、注 9 に挙げた CD－ROM 版による。

13) *das ↗ Drama (1 a) betreffend, kennzeichnend; zum Drama gehörend* のうち、*das Drama kennzeichnend* は「劇を特徴づける」すなわち「劇特有の」から単に「演劇の」と、また *zum Drama gehörend* は「劇の一部（構成要素）を成す」から簡潔に「戯曲の」とここでは訳している。*↗ Drama (1 a)* については言及するまでもないかと思うが、ここでの語詞Dramaに関する同辞典における「参照」に関する表示である。

張」die -e Wirkung, Spannung eines Theaterstücks、およびクルト・ヴィルヘルム・マーレク[14]の覚書から採られた文「ベルトルト・ブレヒトの演劇上の努力は本質において額縁舞台の枠を突破することが狙いであった」Bertolt Brechts -e Bemühungen zielten im Wesentlichen auf die Sprengung des Rahmens der Guckkastenbühne である。

1 で「劇」Drama にいわば直結する「関係・属性」による意味が示されているのに対し、**2** ではそこから派生するところの抽象化された語義が **a** と **b** に区分されて示される。まず **a** で *aufregend u. spannungsreich* という語釈が与えられるが、二つの形容詞——前者は正確には現在分詞を形容詞的に使ったものだが——をつなぐ *u.* すなわち und が重要である。このことは **b** でおこなわれている釈義 *drastisch, einschneidend* が、つまりこの二つの語がコンマで区切られている点からも明らかである。つまりこの *u.* は「かつ」の意味であることが辞書の使用者に見逃されてはなるまい。従って、「緊張にみなぎり興奮を呼び起こす」[15]という語釈のもと、四つの用例が挙げられている。最初に「劇的な結末」ein -es Finale、次に『北ドイツ新報』（NNN[16]）1986年２月12日の記事から「50人の乗客はヘリコプターによる劇的な活動のなか救出された」Die 50 Passagiere wurden in einer -en Aktion mit Hubschraubern geborgen が挙げられたのち、副詞的に使われた例が示される。すなわち「その試合はきわめて劇的なものであった、（その試合は）きわめて劇的な結果に終わった」das Spiel war, verlief äu erst d.[17]と「その大事件は切迫し、劇的状況となった」die Ereignisse haben sich d. zugespitzt[18] である。

b では語義として *drastisch* と *einschneidend* が挙げられる。*drastisch* は「激烈な、猛烈な、極端な、徹底的な、思い切った」等[19]の意味の語である。*einschneidend* は「深刻な、切実な、痛切な、徹底的な」の意の語である。そしてこれらの意味を反映させ、邦訳に際しては、これらの語詞に加え、「劇的」ということばを用いることができるケースもあろう。最初の例などはまさにそうである。すなわち「観客数の劇的な増加」ein -er Anstieg der Besucherzahlen。勿論、「猛烈な、極端な」を用いることも可能ではある。『南ドイツ新聞』（SZ[20]）と『ヴォッヘ』（英語流にいえば、『ウィーク』）から採られた二つの例文からは、dramatisch のもつ、語義における「悲劇的」側面

---

14) Kurt Wilhelm Marek. 1915年１月20日ベルリンに生まれ、1972年４月12日ハンブルクで亡くなったドイツの作家。代表的著作は *Götter, Gräber und Gelehrte* および *Der erste Amerikaner*。用例の文は、rororo taschenbuch 487（1962）所収の *Provokatorische Notizen* から採られたものである。初版は1960年発行。

15) *spannungsreich* を先に訳してみたが、如何であろうか。理屈をいうつもりはないが、*aufregend* と *spannungsreich* は und で結ばれているのだから、この二つが同時に生起することになる。従って、どちらを先に訳しても間違いにはならないという意味ではなく、筆者の個人的感覚かもしれないが、「緊張にみちた（みなぎった）」*spannungsreich* を先に言う方が日本語として落ち着き、それに伴い表現としての自然さが感じられると判断した次第である。

16) Norddeutsche Neueste Nachrichten の略。

17) 「劇的な結果」と北ドイツ新報からの例文が形容詞の付加語的用法であるのに対して、das Spiel verlief äu erst d. は副詞としての用法である。但し、和訳に際しては日本語の表現としての自然さの方を優先させた。因みに、「結果はきわめて劇的に終わった」と訳せば、副詞であることが理解されるかもしれないが。

18) 逐語的には「劇的に切迫した」であるが、dramatisch はこの場合「結果」を表しており、注17と同様の理由で和訳ではいわば見かけ上付加語的になっている。

19) このほか描写などに関して「露骨な、生々しい」の意もある。

20) Süddeutsche Zeitung の略。

がうかがわれよう。すなわち「森の枯死は…深刻な展開をとげた」Das Waldsterben ... habe eine -e Entwicklung genommen および「念力で机を動かしたり…テレパシーによるコミュニケーションの実験は深刻な精神障害を引き起こす可能性がある」Experimente mit Tischerücken ... oder Telekommunikation können -e psychische Störungen auslösen[21] である。**b** では全部で六つの用例が挙げられているが、最後の二つは **a** と同様に dramatisch が副詞として使われた例に当てられている。ここではどちらも「劇的に」を用いて訳しておこう――すなわち『ライン新報』の記事から「住民の環境意識が劇的に高まった」Das Umweltbewusstsein der Bevölkerung hat d. zugenommen および『ハンブルク夕刊新聞』から「これとの関連でゲンシャーは、アメリカ合衆国の景気の動向が劇的におとろえていることを指摘した」In diesem Zusammenhang habe Genscher darauf hingewiesen, dass die Konjunktur in den USA d. nachlasse[22]。

以上が『ドゥーデン』によるドイツ語の dramatisch に関する語釈であるが、語源を同じくする、つまりギリシア語の dramatikós に遡源する、ヨーロッパ諸語の語詞を概観するとき、上の『ドゥーデン』の例でいえば、**1** に挙げられた語義に対応する「劇に関する、劇の」をどの言語の語詞もまず有しているという点を指摘しておきたい。もしこの語義を有していない語があれば、ご教示を願う次第である。加えて、**1** から派生するところの抽象化された語義を有する、というのが大方の言語に当てはまるケースである。つまり、上の dramatisch の例でいえば、**2** に相当するものが加わることになる。但し、その有様（ありよう）はいずれの言語においても全く同じというわけではなく、当然ながら dramatisch の場合とも異同を生ずる。しかしながら、**2** の **a** に示された語義は、こういってもよければ、一般に共有されている。たとえば、フランス語の dramatique、イタリア語の drammàtico、スペイン語の dramático、また英語の dramatic などを想起していただければよいかと思う。**2** の **a** にみる語義 *aufregend u. spannungsreich* を上で「緊張にみなぎり興奮を呼び起こす」と訳したが、別言すればこれは「感動的な」、文脈・状況によっては「緊迫した」とすることもできよう。ただ『ドゥーデン』の語釈が示しているように、その意味するところは「緊張感にみち *(spannungsreich)* かつ *(u.)* 興奮を喚起する *(aufregend)* さま」を意味しているのである。しかもこの「緊張」と「興奮」は、現実の状況（あるいは心的状況）において、二つのものの対立から生ずるところの「緊張」であり「興奮」である。卑近なものいいをすれば、「まず助からないだろう、とても無理だ」という現実の状況（あるいは気持＝心的状況）――これを仮に A とする――にもかかわらず、「劇的な活動のなか救出された」という現実の状況（あるいは事故にあった当事者または見ていた人達の「助かった！」という気持＝心的状況）――これを仮に B とする――、この A と B という相反する二つの対立から生ずるところの「緊張」と「興奮」（あるいは「感動」）

[21] Telekommunikationは、たとえば『独和大辞典』第２版（小学館）によれば、「（電信・電話・ラジオ・テレビなどによる）遠距離通信」とされている。問題の例文については、文の全体、殊に Tischerücken から「（テレパシーによる）遠距離通信」と解釈し、本文のように訳した。筆者の理解に誤りがあれば、読者諸賢のご教示を仰ぐ次第である。

[22] 主文の定形（完了の助動詞）は接続法第一式になっているから、別様に訳すべきかもしれない。当該の文全体が間接引用された結果の habe と判断し、本文のように訳した次第であるが、残念ながら筆者は1985年５月24日の『ハンブルク夕刊新聞』をしらない。読者諸賢のご教示を仰ぐ次第である。

である。この点が「劇的なシーン」という場合の「劇的」、さらには「劇的なるもの」という概念とその本質を考える際の重要なポイントとなろう。

ヨーロッパ諸語に関し、ドイツ語の dramatish に対応する語の語義に関して若干付言しておくと、しばしば共有されている意味として、上で触れたもの意外に「芝居じみた」や「悲劇的な」がある。また、音楽に関して使われる語義（訳せば、「劇的な」）もしばしば共有されている。

4．「劇的」の釈義に関する問題点

上でドイツ語の dramatisch を例に、ヨーロッパの言語において、 ドイツ語の dramatisch に対応する語が複数の意味を有していることを確認した。また、「緊張させる、興奮（あるいは感動）を呼び起こす」の意の語義が、『ドゥーデン』では明確に「緊張」と「興奮（あるいは感動）」が und（かつ）で結ばれ、いわば不可分であることが明確に釈義にあらわれていることも確認した。ここで、『広辞苑』に立ち返ってみたい。すでに引用したところではあるが、再度第五版から「劇的」の項を引用しておく。

げき-てき【劇的】劇に出て来るようなありさま。緊張し
感激させられるさま。「**―**なシーン」

本稿、節「２」で確認したように、第一版では「劇的」の語義は、区分記号によって「①芝居じみるさま」、「②緊張し感激させられるさま」と明確に分けられていた。これが第二版以降現在の形態をとるが、上の釈義を辞書の利用者はどう捉えたらよいのであろうか。勿論「劇に出て来るようなありさま」で、それは特に「緊張し感激させられる（場面での）さま」だと、前の部分と後の部分が補完し合っていると読めばよいのであろう。しかしながら――これは飽くまで筆者の個人的な印象だが――「劇に出て来るようなありさま」とそのあとの釈義とがいわば同等のものとして並立しているという感も禁じえない。殊に「劇に出て来るようなありさま」が先頭に置かれている――つまり辞書の利用者はこちらを先に読むわけだが――ことにより、その後に置かれた「緊張し感激させられるさま」の意を補完するよりも、場合によっては意味を弱めてしまう可能性がなきにしもあらずではないかという印象を、この項をはじめて見たときもった次第である。これは飽くまで筆者の個人的な読みであるとしても次の点は看過できない。

はじめに例を少し出しておこう――「劇的アイロニー」、「劇的なるものをめぐって１」および「劇的なるものをめぐって２」、「劇的状況」。二番目および三番目は早稲田小劇場によってそれぞれ1969年、1970年に上演された芝居のタイトルである。

『広辞苑』のように「劇に出て来るようなありさま」と言ってしまえば、そのありさまは、「劇」つまり「芝居」ではなく、現実の世界のなかで、まるで芝居にでも出て来るようなありさまという意味になってしまう。勿論、場合によっては「劇」以外のジャンル、例えば「小説」のなかで描かれた情景に対して「劇に出て来るようなありさま」ということのできるケースもあろうが、この場

合でもその情景は虚構のなかで描写された「現実」といえよう。とにかく、この種の理屈にはあまり深入りしないことにするが、『広辞苑』における「劇的」の釈義は、「劇」の埒外にある状況に向けられているという意味で、「劇」から切り離されている。しかし、ここに挙げた例はいずれも「劇」の世界との関係で使われる（あるいは、使われた）ものにほかならないのである。

この種の例を蒐集する場合、あまりにも特殊なところから採ることは適切ではない。しかし上の例はいずれも一つの百科事典、それも今日かなり普及しているであろう事典[23]から採ったものである。加えて言えば、百科事典は飽くまで文字通り「百科の事典」であり、専門的事典ではない。理想をいえば、各家庭に一つは常備すべき書物、つまり一般人の利用をも十分想定したところの事典である。勿論、現実は、現在の不況や世人の文字離れ、あるいはこうした書物に対する単なる無関心等々の理由から、専門家のほうがかえってよく利用しているのかもしれない。とにかく、専門的な書物ではなく、一般の利用を顧慮して編纂された事典の解説に出てくる、普通の形容詞の意味が「『広辞苑』でけりがつかない」[24]というのは如何なものであろうか。

ところで、本稿で問題となるのは、冒頭「はじめに」でも述べたように、一つは、『広辞苑』においては「劇的」の釈義は一義的におこなわれているが、現代の日本語において本当にそうであるのかという問題である。もう一つは、「劇に出て来るようなありさま。緊張し感激させられるさま」という語釈そのものの妥当性に関する問題である。今上で述べたきたことは、後者に関する発言にほかならない。「劇的アイロニー」は周知のごとく文学、それも劇作にかかわる述語である。「劇的なるものをめぐって１」および「劇的なるものをめぐって２」についてはすでに言及したところである。ところで「劇的状況」であるが、これは百科事典[25]の「アイロニー」の項に見出される次の解説文からとり出したしたものである。

> 劇中人物が自己の置かれた劇的状況を理解しないままで台詞を語り、これを観客が聴いて真の状況とのギャップを印象づけられれば、その状況の劇的（悲劇的）性格は強烈に意識される。
> （文字の上の点は筆者による）

この文は、いわずもがな「劇」に関するものである。それも「劇中」の事柄に関して解説した文にほかならない。つまり「劇」そのものに関し、「劇のなかでの事柄」について述べる際に「劇的」ということばが使われているのである。しかもこのような使い方、すなわち、演劇・戯曲（すなわち劇）に関する文において「劇的」ということばが使われるのは決して珍しいことではない。むし

---

23) 「知の最高峰『世界大百科事典』」第２版（小学館）、それもここでは我が国の有名メーカーのパソコンに購入時からインストールされている CD－ROM 版を用いた。このことの意味は、本文に記したこととの関連でいえば、「今日かなり普及しているであろう事典」からの例の採択、ということになる。

24) 『広辞苑』「第五版の序」の冒頭で、寿岳章子氏は、ある中国文学者が「象潟」という地名を不審に思い、あれこれ調べたのち『広辞苑』を引いて大いに納得したはなしを出されたのち、「こういう場合、『広辞苑』でけりがついているのは嬉しいことである」と書かれている。つまり、「第五版の序」に見出される表現「『広辞苑』でけりがつく」をもじったものである。

25) 注23に挙げた『世界大百科事典』第２版（CD－ROM 版）を指す。

ろ例を引用すれば枚挙に遑が無いといっても過言ではあるまい。にもかかわらず、『広辞苑』が「劇的」を「劇に出て来るようなありさま（云々）」と釈義していること、つまり語詞「劇的」の使用を「劇」とは切り離された、「劇」の外の世界に限定していることは、語詞「劇的」の現代日本語における使用の現実と明らかに撞着をきたしているのである。この問題についての更なる発言は再度あとでおこなうが、ここで、「劇的」ということばは現代の日本語において本当に一義なのかという問題に移ろう。

見出し項目[26]にいくつかの語義がある場合、『広辞苑』では、①②③…の番号を用いて語釈をおこなうことが「凡例」に明記されている[27]。「劇的」についても第一版ではまさにこれがおこなわれ、「①芝居じみるさま。 ②緊張し感激させられるさま」となっていたことは既に見たところである。加えて「さらに大きく分類する場合は ❶❷❸ …の番号を、細かく区分する場合は㋐㋑㋒…の符号を用い」[28]ることが「凡例」に定められている。引用をもちい再度述べるが「語義がいくつかに分かれる場合には〔中略〕区分を明らかにするために、①②③…の番号を付した」[29] とある。

従って、第五版、というよりも第二版以降すべての版において「劇的」の解説では上記の区分符号が一切使われず、語釈がおこなわれているのであるから、「凡例」に照らし合わせると、この語詞は「語義がいくつかに分かれる場合」には該当しない、ということになる。つまり「劇的」は『広辞苑』によれば、一義のことばである。ここで以下において用いる一つのことばについて断りを述べておく。「二つ以上の語義をもっている」、つまり「複数の語義をもっている」という意味で「複義」ということばを用いる。「複義」ということばはいわゆる標準的・規範的日本語には無いのではないかと思うが、「多義」という言うには語義の数が少ないという感があるため、「複義」ということばを使わせていただく次第である。

上で再度『広辞苑』第一版から「劇的」の語釈「①芝居じみるさま。 ②緊張し感激させられるさま」を引用したが、今日①の意味で「劇的」が使われることはほとんどなくなっていると筆者も判断する。つまり第二版以降①の語義が消えたことには同意するものである。

ところで、ドイツ語の dramatisch を例に、ヨーロッパの言語の場合、ラテン語の dramaticos さらにはギリシア語の dramatikós に源を発する語詞が複義であることを指摘した。筆者の気に掛かるところは、たとえばフランス語の dramatique やイタリア語の drammàtico などには、周知のごとく「悲劇的」の意味があるが、日本語の「劇的」についてもこの意味で使われることはないのかという点である。また、ヨーロッパのすべての言語を調べたわけではないが、英語・ドイツ語・フランス語をはじめ、イタリア語・スペイン語等多くの言語において「劇的」に当たる語が共有している語義として「劇に関する、劇の」がある。というよりも、そもそも語源にある dramaticos や dramatikós がこの語義を有している。『ドゥーデン』から引用した、ドイツ語の dramatisch の例でいえば、この語義が「 **1** 」に挙げられている次第である。つまり、この語義に

[26] 『広辞苑』の「凡例」で用いられていることば。第五版の場合、13頁（下段）参照。
[27] 第五版、13頁（上段）参照。
[28] 第五版、13頁（上段）より引用。
[29] 第五版、13頁（上段）参照。

関して、日本語の「劇的」はどうなのかというのが第二点目の疑問である。この二点に関しては、実のところまだ調査段階にあり、以下でこの二つの点に関して述べることは決して断定的なものでないことをはじめにお断りしておきたい。

第一点目の疑問視している語義「悲劇的」についてであるが、ギリシア悲劇やフランス古典劇に関する研究書や解説書を読むとき、作中の「劇的状況」が「悲劇的状況」の意で使われた「劇的」の例を採集することはさほど難しいことではない。しかしながら、採集した例の数が「語義の定着」を主張するにはまだまだ足らないこと、またケースによってはその著者独特のことばの使い方ではないかと判断されるケースもあることからここでそれらを引用することは控えることにする。尤も、こう言いながらも実は、読者諸賢のなかにすでにお気づきの方もあるかと推察するが、これまで述べてきたなかで一例引用しているのである。それは、すぐ上で百科事典の「アイロニー」の項から引用した解説文に見出される。すなわち――

〔前は略〕その状況の劇的（悲劇的）性格は強烈に意識される。
（文字の上の点は筆者による）

「アイロニー」それも「劇的アイロニー」に関する解説の一文であるが、ここで「劇的性格」は「悲劇的性格」の意味で使われている。そうではなくて、（　）は前のことばとの入れ替え可能というだけの意味であって、語義のうえで ＜「劇的」＝「悲劇的」＞ の意味ではない、という反論が出るかもしれない。しかし、「前のことばとの入れ替え」は、つまるところ同義であればこそ可能となるのである。つまり ＜「劇的」＝「悲劇的」＞ の例の提示をここで控えた理由は、採集した例にこの種のケースも多く、反論も予想されるからである。

＜「劇的」＝「悲劇的」＞ の語義に関して、次のことを誤解のないよう述べておきたい。結論からいえば、「劇的」の語義に「悲劇的な」を加えよ、などと主張する気はない。それではなぜ疑問を提出したのかといえば、今日『広辞苑』の語釈や語義の採集がいわゆる「世人」のことばに傾斜しすぎているのではないかと、ときとして感じられることがあるからにほかならない。新たに言葉を収録しても本の厚み――これは必ずしも頁数ということではない――をできる限り変えない、むしろ「軽量化」さえ目指すという編集方針のもと、徹底した再検討の結果ではあろうが、雅な、けれども殆ど使われることのなくなった言葉が削除され、かわりに第五版では「ぷっつん・どたキャン・とほほ・マッチョ」[30] など「粒選りの日本語」[31] が新収録された次第である[32]。

---

30) 1998年11月11日の『広辞苑』第五版全国一斉発売に先立ち本屋の店頭に置かれた宣伝・案内用の冊子（表表紙・中面全14頁・裏表紙から成る）――以下注では、単に「パンフレット」と記す――の５頁より引用。

31) 「パンフレット」５頁より引用。

32) 「パンフレット」（４頁）によれば、書物の厚みと総頁数ならびに軽量化について次のように記されている。
片手で持てる大きさと重さが「使いやすい」と定評のある『広辞苑』。第五版の総頁数は、三〇一〇頁と第四版に比べ一二八頁増加したにもかかわらず、用紙の改良により、さらなる軽量化（マイナス一二五グラム）を実現。厚さも第四版と変わらず、使いやすさを一層向上させました。

百科事典は、専門性という点からみたとき、世の人にとっていわば近づき難い特殊な書物ではない。むしろ一般的な、幅広い層の利用を想定して編まれた事典である。つまり、語詞「劇的」に今日「悲劇的」の意味があるか否かはさておき、語詞「劇的」が「劇」に関することとの関連で頻繁に使われていることは歴然たる事実である。

「世人」にあっては確かに「劇的」は『広辞苑』第五版の与える語義でつかわれているのであろう。しかし、同時に、戯曲・演劇・ドラマに関する書物をみるとき、読者諸賢も体験されていることかと思うが、「劇的」ということばに頻繁に出会う。つまり、上の「疑問」も結局は「劇に出て来るようなありさま。緊張し感激させられるさま」という語釈に対する批判へと回帰する次第である。

5．＜名詞＋接尾辞＞型形容詞の語義形成のプロセス

ドイツ語の dramatisch というよりも、古代ギリシア語の dramatikós、後期ラテン語の dramaticos 以来、ここから派生した当該の語詞は、ヨーロッパの多くの言語において「劇に関する、劇の」の語義を有している。上の節「4」で述べた語義「悲劇的」の次に問題とするのがこの語義である。つまりここから、日本語の「劇的」の場合はどいうかということを考えてみようと思うのである。そこで、ヨーロッパの言語を念頭に置きながら、＜名詞＋接尾辞＞型形容詞の語義獲得プロセスという一般的な問題から始めることにしよう。

名詞（N）に接尾辞が付加され、形容詞化されたとき、新たに形成されたその形容詞の語義獲得のプロセスを、図を用いながら考えてみる。

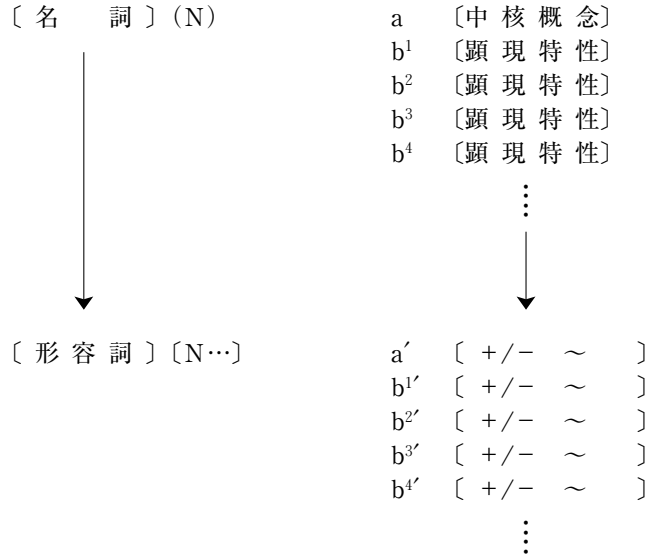

図４・１

はじめに図４・１で用いていることばと記号について説明しておく。まず、「中核概念」と「顕現特性」であるが、これは次のように規定する。

〔 中 核 概 念 〕：名詞（N）の基本的な意味・定義
〔 顕 現 特 性 〕：随伴的に生起する、Nに関する特性

中核概念は、上のように規定した場合、社会的・文化的背景を同じくする集団にあっては一般的に通用する概念である。中核概念の定義としては、理想をいえば、時代・言語の枠ををこえて普遍的に通用する内容であることが望ましい。このことは名詞（N）として、たとえば「花瓶」などを考えるとわかりやすいかと思う。つまり、「花瓶」の中核概念は「花をいけるための器」となる。これに対する次のような反論「花瓶は、花をいけるための器とはかぎらない。何もいけずに飾ることだってある」は、上の図でいえば、「顕現特性」にかかわる発言である。つまり、顕現特性は社会的・文化的背景あるいは時代などにより左右されることのある部分である。

次に記号であるが、〔N…〕は形容詞の図式的表記であり、「…」の部分は接尾辞をあらわす。Nの中核概念 a によって、Nと結び付くことになる語義が図下段の「形容詞」欄では、a′ としてあ

〔 劇 〕（N）	a	〔筋書にもとづいて、演者が舞台で言葉や動作によって、出来事や人物あるいは思想・感情を表現して見せるもの[33] 〕
	b^1	〔緊迫した場面／予期せぬ結末 〕
	b^2	〔感情をゆさぶる言葉や身体表現 〕
	b^3	〔日常を逸脱した大仰な言葉・動作 〕
	b^4	〔悲痛な筋あるいは結末 〕
	⋮	
〔 劇 的 〕〔N…〕	a′	〔 ＋ 劇に関する、劇の 〕
	$b^{1\prime}$	〔 ＋ 緊張感みなぎる 〕
	$b^{2\prime}$	〔 ＋ 興奮・感動を呼び起こす 〕
	$b^{3\prime}$	〔 ＋ 極端な、思い切った 〕
	$b^{4\prime}$	〔 ＋ 痛切な、深刻な 〕
	⋮	

図４・２・１

33) 「劇」の中核概念に関するこの記述を読んだ読者諸賢のなかには、「演劇」について解説した『広辞苑』（第五版）のことば「作者の仕組んだ筋書（戯曲・台本）にもとづき、俳優（演者）が舞台の上で言葉（台詞）・動作によって物語・人物また思想・感情などを表現して観客に見せる総合芸術」を想起される方もいらっしゃるであろう。但し、ここでの「劇」に関する中核概念の規定は『広辞苑』のこのことばもさることながら、むしろそれ以上に Drama に関する『ドゥーデン』（注９参照）の次の語釈を参考にしている。

Bühnenstück, Trauerspiel u. Lustspiel umfassende literarische Gattung, in der eine Handlung durch die beteiligten Personen auf der Bühne dargestellt wird.

らわされ、この語義が有る場合は〔 ＋　～　〕、無い場合は〔 －　～　〕となる。そしてその具体的な語義が「～」のところに記入される。「顕現特性」に関しても同様であり、顕現特性 b^1 から生起する語義が $b^{1\prime}$ であり、その語義が当該の言語において、有る場合は〔 ＋　～　〕、無い場合は〔 －　～　〕となる。尤も、この節における図では、a' および $b^{1\prime}$～$b^{4\prime}$ には実際に生起する語義を記入するため、すべて＋となる。換言すれば、「＋/－」は、のちの日本語と比較する際に、日本語の語詞「劇的」に関する語義欄 a'、$b^{1\prime}$ … で活きてくることになる。

以上を踏まえて、名詞 Drama と形容詞 dramatisch についてこの図を満たせば図４・２・１のようになる。但し、一口に Drama といっても Trauerspiel（悲劇）と Lustspiel（喜劇）があるが、ここでは前者を対象としている。また、ドイツ語で記入する方法もあるが、ドイツ語を専門とされない読者のために日本語に訳しなおして再度説明するという迂回を避けるため、すべて日本語で記入している。

「劇」に関する顕現特性は、筆者が思い当たるものを例として挙げた次第であり、上の b^1～b^4 だけではない。従って、記号「⋮」はその他の顕現特性をあわしている。その下の形容詞の語義に関しても同様であり、$b^{1\prime}$～$b^{4\prime}$ の下の「⋮」は省略されたその他の顕現特性に対応する語義である。

ここで注意しておきたいことは、上の図は顕現特性から語義が生起するプロセスの一面をあらわしたものである。実際の語義の獲得は、顕現特性が相互に作用し合うなかから生まれてくることがしばしばであることを忘れてはなるまい。つまり、$<b^1 \rightarrow b^{1\prime}>$、$<b^2 \rightarrow b^{2\prime}>$…というケースだけではなく、例えば$<b^1$〔緊迫した場面／予期せぬ結末〕$\rightarrow b^{4\prime}$〔痛切な、深刻な〕$>$が生起する場合もあろう。また、より一般化した表記を用いるならば$<b^n \rightarrow b^{n\prime}>$という単一の過程についても、そのプロセスは図４・３に示したように、（ｉ）名詞Ｎにおいて顕現する特性 b^n の観察と認知、（ii）認知された特性 b^n の、言語記号化による一般的語義としての形成、（iii）新たに生起した語義 $b^{n\prime}$ の、名詞Ｎに関する既存の語義体系への編入による名詞Ｎの語義体系全体の再編成というプロセスが少なくともかかわっている。従って、この二つの図とそれに関して述べたことは飽くまで顕現特性と語義との関係についての一端を示したものである。

（ｉ）特性の認知
（顕現特性 b^n の観察と認知）
|
（ii）語義の形成
（b^n の言語記号化による語義の形成）
|
（iii）語義の体系的再編成
（既存の語義体系への $b^{n\prime}$ の編入による新たな語義体系の再編成）

図４・３

さらに補足すれば、ある名詞Ｎに関し、その言語圏のある地域では、語義について〔$a' + b^{1'}$〕のかたちで、また別の地域では〔$a' + b^{2'}$〕、さらにまた別の地域では〔$a' + b^{3'}$〕のかたちで用いられているというケースもあろう。殊に方言が強く残存する言語圏ではありがちな傾向である。それが地域間の社会的・経済的・文化的交流のなかで徐々に他の地域における語義が吸収され、定着していき最終的に〔$a' + b^{1'} + b^{2'} + b^{3'} + \cdots$〕という語義の体系が形成される場合もある。さらに極端なケースは、そもそも当該の名詞の中核概念や顕現特性とはまったく切り離されて語義が形成され、定着してしまう場合である。具体的な例としては、「ことばの誤用」による新たな語義の形成が挙げられるが、このようないわば特殊なケースはここでは除外する。従って、図４・１、図４・２・１および図４・３の助けをかりて上に述べたことは、飽くまで名詞に関する語義形成の基本的なメカニズムの一端を表したものである。但し、最も単純な事例によって、メカニズムの根底にあるプロセスを表現しようとした試みにほかならない。

図４・２・１の下段は、一つの論文における内的整合性を意識するあまり、『ドゥーデン』から引用したドイツ語の dramatisch の釈義に関する説明において用いたことば（日本語）に幾分とらわれ過ぎている感があるかもしれない。そこで、英語の dramatic 等 を念頭に置き、図４・２・１の下段を、図４・２・２として次のように表わしたものも掲げておこう。

〔 劇　　的 〕〔Ｎ…〕

a'	〔 ＋ 劇に関する、劇の、脚本の	〕
$b^{1'}$	〔 ＋ 緊迫した	〕
$b^{2'}$	〔 ＋ 感動的な	〕
$b^{3'}$	〔 ＋ 芝居じみた	〕
$b^{4'}$	〔 ＋ 悲劇的な	〕
	⋮	

図４・２・２

言語により、とりわけ $b^{n'}$ の語義は、幾分あるいはかなり相違する場合もある。しかし、本稿でヨーロッパの言語との比較において問題としているのは、ヨーロッパの語詞における複義性と日本語の「劇的」の一義性の問題ならびに『広辞苑』における「劇的」の語釈に関する妥当性の問題である。そこで、日本語の「劇的」に戻ろう。

６.「劇的」の釈義に関する問題

本稿、節「２」で見たように、『広辞苑』第一版では「劇的」の釈義は「①芝居じみるさま。②緊張し感激させられるさま」となっており、「劇的」は二義つまり複義であった。これが第二版以降「①芝居じみるさま」がなくなり、「劇的」は一義的に解説される。筆者は、実際の使用における「劇的」の一義性に疑問を呈しているわけだが、第一版における「芝居じみるさま」がなくなったことに異議を唱えるものではない。

今日世人はどこで「劇的」という言葉に出会うのだろうか。スポーツや事件、換言すれば新聞やテレビで出会うことが多いのではないだろうか。「劇的なサヨナラ満塁ホームラン」という新聞の見出し、「試合の幕切れは劇的でした」というアナウンサーのことば、「劇的な救出劇」ということば、加えてその場面などなどである。つまり、第二版以降の『広辞苑』が与えている意味での「劇的」に多く出会っているのであろう。もはや「芝居じみるさま」という意味での「劇的」などさがすのは甚だ困難というのが実情である。確かに「劇的」の語義体系から「芝居じみるさま」は消えてしまった。仮にそのような「劇的」が見つかっても、国語辞典として掲載するには、語義に関しても実際の使用における定着度が問題となるであろうから、語義「芝居じみるさま」は消えてしまったといって差し支えあるまい。ここで、第二版以降の『広辞苑』における「劇的」について、図４・２・２を用いて、「＋/－」による語義の判定をおこなうと次のようになる。

〔 劇　　的 〕〔N…〕　　a′　〔 － 劇に関する、劇の、脚本の　〕
b^{1}′　〔 ＋ 緊迫した　〕
b^{2}′　〔 ＋ 感動的な　〕
b^{3}′　〔 － 芝居じみた　〕
b^{4}′　〔 － 悲劇的な　〕

図４・２・３

一義であるから、「⋮」はない。また、上図は図４・２・２を基準にして作成したことにより、b^{1}′ と b^{2}′ が独立しているために、二義のように見えるが、これは飽くまで見かけ上のことであり、この二つは統合される。

日本語の「劇的」から『広辞苑』第一版にはまだあった「①芝居じみるさま」が第二版以降無くなったことに関してここで幾分理屈を述べさせていただくと――このような問いではじめるが――今日世人のみる「劇」とはいかなるものであろうか。能楽・狂言・歌舞伎あるいは劇団によって上演される劇をみる人も確かにいるだろう。けれども頻度――ひいてはそれが、みる時間の国民的規模での総計、つまり「世人が最も多く見る劇」ということにつながるわけだが――の点でテレビドラマにはかなうまい。今日のテレビドラマには「芝居じみるさま」が稀少である、否、その内容はしばしば現実的である。歴史もののドラマであっても、しばしば歴史の現実を探ろうとする。つまり、虚構のなかで現実を描くという手法のものが少なくない。尤も、筆者はそれほどテレビをみてはいないのであるが。要するに世人の「劇」は今日もはや芝居じみていないのである。加えて、筆者の個人的感覚によるものかもしれないが、「ゲキテキ」という強い言葉の響きに、「激」という字の音「ゲキ」とつながるものを半ば無意識のうちに重ね合わせてしまうこともあるのではないだろうか。その結果「劇的」は、様態としての「激」と不可分の「緊張・感動」と自然結び付いてしまうのである。尤もこれは、筆者の個人的感覚世界から判じた発言であるから、「事実」に立ち返ろう。ただ、その前に、現時点ではまだ課題の段階にある二つの事柄に触れておきたい。

ギリシア悲劇やフランス古典劇等について述べた文のなかで、本稿、節「４」でも述べたように、

「悲劇的」と等価で使われた「劇的」に出会うことがある。つまり、図４・２・３でいえば、〔 － 悲劇的な〕ではなく、〔 ＋ 悲劇的な〕と判定されるケースに遭遇することがある。それも専門性の高い書物ばかりでなく、百科事典といった世人をも利用者の対象とする書物からもそのような例が採集される。ただ、現時点では、採集された例が少数であるから、この点について、〔 － 悲劇的な〕ではなく、〔 ＋ 悲劇的な〕であると主張する段階にはない。

もう一つは〔 － 劇に関する、劇の〕に関する事柄である。ヨーロッパの言語における当該の語詞は広くこの意味をもっている。すなわち＜名詞＋接尾辞＞型形容詞にあっては、名詞Ｎにいわば即つながる語義「Ｎに関する、Ｎの」を有するものが多い。この語義、つまり a′ を仮に一次的語義と呼ぶことにすると、日本語の「劇的」は『広辞苑』によれば、派生的に生じた二次的語義のみを有し、一次的語義をもたない形容詞となる。日本語の「劇的」に関して、〔 ＋ 劇に関する、劇の〕と表記しうる例を筆者は既に採集している。ただその数は、〔 ＋ 悲劇的な〕の場合以上に少ない。実のところ、採集した例のなかには筆者自身も首をかしげたくなるものがある。つまり、正しい日本語――とでもいおうか――を使うことを心掛けている人は、この意味の場合「劇的な」ではなく、「演劇上の、演劇の」とか「戯曲に関する、戯曲の」といった表現を用いていることが多い。接尾語「的」を使った場合でも、「演劇的」とか「戯曲的」ということばを使っている。従って、〔 － 悲劇的な〕に対する〔 ＋ 悲劇的な〕の場合以上に、〔 － 劇に関する、劇の〕に対する〔 ＋ 劇に関する、劇の〕については主張する気はないのだが、ヨーロッパの言語との比較という観点からこの現象、すなわち一次的語義がなく、二次的語義のみがあるということは一つの興味深い事柄であろう。

立ち返るべき「事実」とは次のことである。「劇的」という言葉は今日、「劇」に直接関係する文脈のなかで使われている。それは何も専門性の高い特別な書物とか、専門家集団だけによる特別な状況においてではなく、世人をも対象とした書物あるいは状況（講演会等）においても使われているのである。

国語学者でもない筆者の指摘では説得力がないというのであれば、ある人物による一つの指摘を援用しながら、この点に言及しておこう。本来次のようなものいいはしたくないのだが、『広辞苑』の執筆陣が一流の方々であるならば、「劇」の分野でそれに劣らず一流人である木下順二氏が、ある本のなかで、『大辞林』と『広辞苑』から「劇的」の語釈をひいたのち、次のように述べておられる。

> いずれもただ〝緊張〟、〝感激〟、〝感動〟といっているだけで、〝劇的〟の本質あるいは中身を説明しているわけではない。

辞書の語釈はことばの本質を解説することではない、などという反論が果たして出てくるものであろうか。しかし、それにしても「劇」の大家に「〝劇的〟の本質あるいは中身を説明しているわ

けではない」といわれるような釈義は如何なものであろうか。ここで、一つのエピソードを記してみたい。といっても、実は、筆者が書いた全くの虚構であり、次の文章が実在の人物や出来事とは全く関係のないことをあらかじめお断りしておく。

白川は世界的な建築家だが、ある日園遊会への招待状が彼のもとに届いた。当日は快晴、秋の心地よい日であった。いとやんごとなき方が案内の者に伴われ、来園した人々に挨拶のことばを掛けられていく。次第次第に白川の番が近づいてくる。遂にその方が白川の前にお立ちになると、にこやかな表情でこう仰せになった。「白川はたてものをつくってるんだって」。いとやんごとなき方のこのお言葉をきくや、白川の全身に電撃が走った。日頃、白川は「先生は、高層ビルとか、美術館の設計とかをもっぱら手掛けていらっしゃるんでしょうね」などと言われ、そうした言葉をきく度に、「何も高層ビルでなくても、気に入れば個人の家でも設計するさ、それが本当に意味のある仕事なら倉庫だってつくるさ」と思っていた。「『たてもの』！そうだ！俺がつくっているのはまさに『たてもの』だ！」「このお方は俺の仕事、俺がつくっているものの本質を『たてもの』という一言で表現された。」白川は顔をあげることができず、頭（こうべ）を垂れたまま、しかしはっきりとした声で、「はい」と答えた。

学術論文のなかに、自分の書いた虚構を挿入するとは戯れが過ぎるというご批判をいただくかもしれない。しかし、この挿話によって筆者が言いたいのは、次のことである。紙面に制約があるとはいえ、ある程度の字数を費やしていながら、そのことばの「本質」も「中身」も説明していない語釈もあれば、大きな総体の本質を一言で言い当てるケースもある、ということである。尤も、この点については『広辞苑』執筆陣の側から「国語辞典がおこなう語釈とは」という観点から反論も予想されるが、『広辞苑』における「劇的」の釈義の問題姓を、次に別な視点から裏付ける「劇的」の用例を幾つか木下順二氏の同じ本からひろってみる。

さっきもいったように、〝劇的〟という言葉は新聞などで気軽に使われているが、そういう〝劇的〟と、ドラマとして組み立てられた〝劇的〟とはどう違うのか、その入り口のところをのぞいてみることにします。

だがそれは表面にあらわれた事件がショッキングだということなのであって、その〝ショッキング〟はドラマ、劇における〝劇的〟とは少々違うのです。

私がここで論じようとしているのは、紀元前五、四世紀[34]にギリシアで堅固に構築された、行動を内容とするあの〝劇的〟の問題なのです。

---

[34] 「紀元前五、四世紀」という表現は木下氏によるものであり、引用に際しての筆者の誤記ではない。

木下順二氏の一般向けに書かれた本からひろった、この三つの文に出てくる「劇的」はすべて「劇」における「劇的」である。木下氏の本にかぎらず、このような例、すなわち「劇」との関係で用いられた「劇的」は、演劇・戯曲・ドラマに関する書物はもとより、百科の事典からも容易に採集される。つまり、現代の日本語において「劇的」は、新聞・テレビなどで「劇的なサヨナラ満塁ホームラン」といったケースで用いられている一方で、演劇・戯曲・ドラマに関する文脈においても広く使われている事実がある。従って、「劇に出て来るようなありさま。緊張し感激させられるさま」という語釈が、「劇」における「劇的」の本質・内容を的確に説明するものであるか否かという問題は別にしても、「劇に出て来るようなありさま」という語釈によって、語詞「劇的」の使用を「劇」の埒外に置くこの語釈の誤謬は訂正さるべきものではないかと考える次第である。

最後に次の点を明らかにし、本稿を閉じることにする。筆者が上で用いた木下氏の本とは、岩波新書に収録された『〝劇的〟とは』（新赤版 402）である[35]。この本の第１刷発行年は 1995であり、方や『広辞苑』第五版のそれは1998である。要するに、「第四版収録の全二二万余項目を徹底的に校閲・再検討」[36] された際に、誠に謙虚なことかと思うが、自社から出版されている書物を、検討資料としては対象外、とされたものと拝察する次第である。

---

35) ここ、すなわち本稿の節「６」における『〝劇的〟とは』からの四つの引用は、順に３頁、11－12頁、14頁、16頁からおこなったものである。

36) 「パンフレット」３頁より引用。